

# 6 基礎編 古文の主語・会話文

なぞつて確かめよう

今は昔、唐に、孔子、道を行き給ふに、八つばかりな

注中国の昔の呼び方

る童あひぬ。童が孔子に問ひ申すやう、「日の入る所と

注問ひ申し上げることに

洛陽と、いづれか遠き」と。孔子、いらへ給ふやう、「日

注中国の地名。当時の首都

注お答えになることには

の入る所は遠し。洛陽は近し」。童の申すやう、「日の出

で入る所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。されば日の出づる所は

近し。洛陽は遠しと思ふ」と申しければ、孔子、「かし

こき童なり」と感じ給ひける。(「宇治拾遺物語」より)

注感心なされた

① 文章の冒頭に着目し、この文章に登場する二名の人物を確認しなさい。

② 線部の前に省略されている主語を確認しなさい。

③ に着目し、前後に会話文・心内文がくることを確認しなさい。

## 法則を押さえよう

法則 ① 登場人物を把握する

1 文章の冒頭に着目して登場人物を押さえる

物語や説話などでは、文章の冒頭に主な登場人物が示されることが多い。登場人物は動物や自然物、神仏など、人間以外の場合もある。

\*日記や随筆、紀行文などで主語が書かれていない場合、動作主＝筆者である

## 確認問題

1 次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

ある犬、肉を啜へて川を渡る。真中にて、その影、水に映りて大き

に見えければ、我が啜ゆる所の肉より大きになると心得て、これを捨てて、

かれを取らんとす。故に、二つながら、これを失ふ。

その如く、重欲心の輩は、他の宝を羨み、事にふれて貪るほどに、

忽ち天罰を蒙る。我が持つ所の宝をも、失ふ事あり。

(「伊曾保物語」より)

(1) 線①～⑤の主語を古文中からそれぞれ三字で書き抜きなさい。なお、同じ言葉を何回選んでもよい。

法則 ①

①

②

(2) 線部「重欲心の輩」とあるが、ここではどのような行動を取った誰を指しているか。現代語で書きなさい。

法則 ①

③

ことが多い。

2 同じ人物を違った呼び名で表すことがある

本名と役職を交ぜて用いたり、二度目は「その人」などと指示語や代名詞を用いて表したりすることもある。

例 これも今は昔、ある僧、人のもとへ行きけり。酒など勧めけるに、氷魚はじめて出で来たりければ、あるじ珍しく思ひて、もてなしけり。  
「あるじ」人(×ある僧)

3 一度登場した人物は省略されることがある

例 恵心僧都年たかくわりなき母を持ちたまひけり。(恵心僧都は) 志は深かりけれども、いと事もかなはねば、思ふばかりにて……

4 助詞に注意して主語を捉える

助詞の「の」が主語を表すこともある。

※主語を表す助詞(現代語で「が」「は」など)は省略されることが多い。

5 敬語が使われている人物や使われ方をヒントとする

例 孔子に問ひ申すやう、……孔子、いらへ給ふやう、……

↓線部に孔子には敬意を表す謙讓語、——線部には孔子の動作を高める尊敬語が用いられているので、線部は童の動作であると思われる。

法則 2 会話文を捉える

1 会話文の前にくる語から捉える

① 「いへく」「言ひやう」などには会話文が続く。

② 「発言者+」の「〜て」「〜に」「〜に」「〜に」(発言のきつかけとなる出来事+)「ば」などには会話文・心内文(心の中で話した言葉)が続くことが多い。

2 会話文の後にくる語(「と」「よ」「や」)などの引用の助詞から捉える

例 「仏の賜ふ物にてあるにやあらん」と、いとはかなく思へども……

\*1・2合わせて考えるとよりわかりやすい。

例 すべき方もなくて「さり」とあらんやは「と」……

3 地の文または会話文だけに敬語が使われるなど、文体の違いをヒントとする

\*心内文も、この法則で捉えられる。

(3) この古文中には、「ある犬」の勘違いが書かれた心内文がある。その部分を探し、そのまま書き抜きなさい。  
 法則 2

2 次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

ある百姓、畑に物種をまきあたりける。隣畑の与太郎見て、「なんと次郎作、結構な日和じや。何をまきやるぞ」。次郎作、返事すれども聞えず。与太郎見て、何といふぞ。すきと聞えぬといへば、そばへ寄り、耳のはたへささやきて、「大豆をまく」といふ。「はてさて、ささやかいでも大事な事を」といへば、「高ふ言へば、鳩が聞く」。  
(「軽口本集」より)

(1) この文章の登場人物の名前を全て書き抜きなさい。

法則 1

(2) この古文中には、「」の付けられていない会話文がある。その部分を探し、そのまま書き抜きなさい。

法則 2

(3) 線①〜④の中で主語が他の三つと異なるもの一つを選び、番号で答えなさい。

法則 1